

「英靈の皆様、我々グアム島の遺族は、日頃大変お世話になり  
ご支援を賜っております関係者の皆様方と

恒例になりました新年のご挨拶に参りました。

犠牲者の皆様方の尊い思いを、子々孫々決して忘れず  
伝えていくことを先ずもつてお誓い申し上げます。

そして本日極寒の中、また週末の大変お忙しい中、  
土屋正忠前代議士を始め、同志の皆様方にお運びをいただきまして  
誠にありがとうございます。心より厚く御礼を申し上げます。

さて既に皆様ご存知のように、グアム島で戦われた二万名の勇士は  
昭和十九年一月に極寒の満州より絶対国防圏と位置づけられた  
常夏の島に転属させられ、温度差が何と六十度にも及ぶ  
厳しい気候の変化にも関わらず、

日夜懸命に訓練と陣地構築に取り掛かりましたが、  
昭和十九年七月二十一日早朝、紺碧の海を真つ黒くする程の  
多数の大艦隊が襲来し、一斉艦砲射撃と猛烈な空爆を受け、  
島が変形するほどの凄まじいものでした。

援軍なし、絶体絶命、圧倒的な物量と兵力不利のなか

「わが身を持つて太平洋の防波堤にならん」と、いささかも

怯まず、本土防衛の為、つまり日本に残した最愛の家族の為に命を捧げられました。

ここに改めまして英靈の皆様方に、心からの畏敬と感謝と哀悼の真を捧げます。

先の大戦では国に命を捧げられた一百四十万の兵士のうち、わずか三十三万柱、なんと十二パーセントしか帰還できていない現状に大変悲しく、申し訳なく、惻隱の情も感じられない現実に強い失望と憤りを感じるのは私だけではないと思います。日本の今日の発展と平和国家は、英靈の皆様方の犠牲の上にあると感謝しつつも、今日の日本は英靈の皆様方が我々に将来を託し、夢見た日本の姿ではないはずです。

現に、親子間の虐待や親や子を殺め、誰でもいいと人を殺める若者、親を埋葬せず年金を騙し取る詐欺など、日本人の矜持を失くし、言葉では表現の仕様もない出来事が多々あります。

それらは戦後政府の怠慢で、尊い犠牲者を長い間粗末に放置して、恐れも感謝も畏敬の念もないツケの表れといわれても仕方がありません。

幸い元気に帰国された戦友の方々も九十歳を越えられ、数も激減し、記憶も薄れつつあります。

直系の遺族達も七十歳を数えます。急がねばなりません。

実は皆様、昨年は不思議にも、我々有志により激戦地アガツトに建立した慰靈碑付近から十柱が出土し、六十七年ぶりに祖国にお連れする事ができました。

昨年は政府首脳から、今年度から僅かですが予算を増やし、戦地に眠る遺骨の収集は「国の責任」であり、

「取り組みを強めたい」と話しがありました。

私たちもそれを堅く信じ、機会あるたびに篤心ある政治家やマスコミの方々に強く働きかけ、お願いをし、微力ではありますが一生懸命努力をする所存であります。

最後になりますが、先の大戦を風化させず、

現地グアムの同志の方々と共に慰靈塔の清掃と巡礼、そして遺族の最大の念願でありますご遺骨の早期収集とご帰還を果たせるよう、更なる皆様方のご厚情を心よりお願い申し上げまして、私の挨拶といったします。

合掌

平成二十三年一月三十日

ピースリングオブグアムジャパン 代表 松本平太郎